

大曲市内小友の礫石経塚

今野沙貴子*

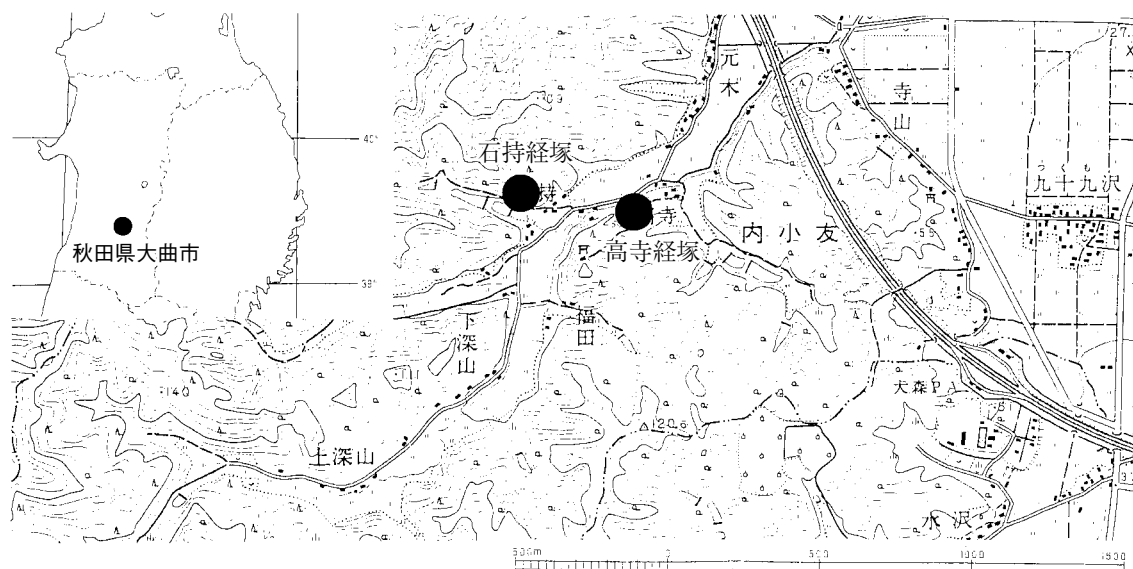
1、はじめに

秋田県内における礫石経塚⁽¹⁾に関する研究は、菅江真澄と真崎勇助によって始められた。菅江はその著作の中で、県南を中心に4ヶ所の礫石経出土地を記録している⁽²⁾。真崎もまた、県南の礫石経出土地を3ヶ所記録に残している⁽³⁾。これらの中には、現在では遺物・出土地点共に確認できない事例も含まれており、遺跡の存在を後世に伝える資料として重要である。

昭和期には、武藤鉄城が仙北郡西明寺村（現西木村）・八津経塚の調査成果を報告している⁽⁴⁾。これは、秋田県内における礫石経塚の初の調査例として注目されるものである。もう一つ昭和期の代表的な研究として挙げられるのは、奈良修介の報告である。奈良は、「戦後の新例」のみを扱うと断りながらも、礫石経出土の経塚を9ヶ所掲げている⁽⁵⁾。これは、県内全域を対象とした初めての集成的報告である。

以上が秋田県内での礫石経塚に関する研究の概観であるが、奈良の研究以降は個々の遺跡について簡単な報告が出されているにすぎない。現在、県内では礫石経塚（参考地も含む）が131ヶ所確認されているが⁽⁶⁾、それらの大部分は正式な発掘調査を経ていない。わずかに鳥海町、神岡町で礫石経塚の発掘調査例があるが⁽⁷⁾、詳細は未報告である。

礫石経の埋納目的は多様であり、すべての礫石経塚を、同じ性質のものとして一様に捉えることはできない。個々の遺跡がどのような性格を持つかを分析することが、研究の第一歩である。そのことを踏まえて、本稿では大曲市内小友所在の高寺経塚、石持経塚を取りあげる。両経塚の発掘時の状況を記録し、その情報を基に若干の考察を加えることとしたい。



第1図 高寺経塚・石持経塚の位置

* 秋田県埋蔵文化財センター南調査課調査・研究員

2、高寺経塚の概要

①遺跡の環境

高寺経塚は、大曲市内小友字高寺に所在する礫石経塚である。大曲市は秋田県の南東部、横手盆地のほぼ中央西側に位置する。内小友地区は市域の南西部にあたり、東は雄物川に、西は出羽丘陵に接している。高寺集落は内小友地区の南西端、高寺川が出羽丘陵に作り出した沢地形の底に立地する。経塚は高寺山北麓の整地された丘上に築かれており、礫石経埋納部分の上部には現在、「多宝如来堂」と呼ばれるお堂が東を向いた状態で鎮座している。

菅江真澄の記録によると、高寺山には福王寺があったとされ、それは養老3年(719)の開基であったと伝えられる⁽⁸⁾。高寺山頂は高寺山城跡にあたり、現在でも遺構を確認することができる。高寺山城には、「天正の頃(1573～1591)、あるいは豊臣家没落後に難波平治満友が築城し、家臣200人ばかりと共に住みついた」という伝承が残っている。また、現在内小友字館前にある満友寺は難波平治満友によって創建されたものと言われ、元々は高寺山にあったとされている⁽⁹⁾。経塚のある丘の西側には、近世の僧の庵跡であると言われる閑居屋敷跡が隣接している。

②遺跡の現況

高寺経塚では、多宝如来堂の下に礫石経がむき出しの状態で見られる。お堂の下には多くの川原石が確認できるが、表採できるものに関しては、墨書の確認できるものは少ない。

堂内部には、向かって右側に石仏が1体、左側に無縫塔が1基安置されている。かつては石仏がもう1体あったらしいが、今は頭部の一部が伝わるのみである。堂の管理者の話によると、石仏はかつて皮膚病の神様として知られ、少なくとも大正末から昭和の初め頃までは、田沢湖町からも参拝客が来るほど信仰を集めていたという。現在は参拝客も少なくなったということであるが、年に一度の祭典は継続して行われている。祭典は旧暦4月8日に行われ、近辺の4～5軒が参加する。

③発掘前の経塚

経塚は昭和55年頃の高寺如来堂改築の際、管理者の伊藤福右衛門氏により発掘されているが、発掘前の遺跡の状態を伝えるものに、榊田凌次郎の報告がある⁽¹⁰⁾。以下にその概要を記す。

- (イ) 昭和39年5月5日、高寺・観音山(＝高寺山)の麓にある多宝如来堂の下から、経石(＝礫石経)を拾う。堂の下に手を入れると、多くの経石をかき集めることができる。その経石は一字一石経で、「随」「変」「蝦」「菓」「由」「足」「吉」「衆」「穩」「相」「天」「薩」「己」「摩」「問」「讃」などの文字を確認する。
- (ロ) 多宝如来堂の中には、左に70cm位の石仏、右に墓碑(＝無縫塔)が祭られている。墓碑には、「円寂典参禅心沙弥 天明六年十一月八日」の銘がある。この「禅心」という人物は、内小友満友寺の過去帳にある「即翁禅心沙弥 板井田第助之父」であると考えられる⁽¹¹⁾。
- (ハ) 石仏の台座正面には「石経 佛 供養」の銘が、その左側には「享保七 年寅□ 九月十八日」の銘がある⁽¹²⁾。それにより、享保7年(1722)に経塚が発見され、それを供養する意味において石仏がたてられたと解釈できる。享保7年には、経塚の伝承が忘れられていたとすると、少なくともそれより百年前、江戸初期か室町末に経塚が構築されたと見るのが妥当である。

④経塚発掘時の状況

発掘者である伊藤氏の証言を基にして、経塚発掘時の状況についてまとめる。

- (イ) 伊藤氏は多宝如来堂を経塚上から動かし、発掘に差障りのない状況にした。氏は、まず地表面に

盛り上がっている礫石経⁽¹³⁾をスコップで取り除き、礫石経埋納部分を地表と同じ高さに合わせた。

そこから先は、全て手作業で礫石経の取り上げを行った。埋まっている礫石経の半分ほどを取り上げた時点で作業を終了し、礫石経を元の状態に埋め戻した。

(ロ) 礫石経は多宝如来堂の真下、畳半分くらいの範囲に埋められていた。礫石経の取り上げを行ったのは、お堂に向かって右半分の範囲であった。礫石経には扁平な川原石が用いられており、取り上げた総数は、一輪車2台分であった。遺物は礫石経のみで、形態は一字一石経であった⁽¹⁴⁾。

(ハ) 礫石経が出なくなる深さまで掘ったが、その時の深さは地表より50cmほど下であった。礫石経は「放り込んだような」状態で納められていた。特に石室などは作っておらず、土坑にそのまま礫石経を納めたものと思われる⁽¹⁵⁾。

⑤出土遺物について

今までに高寺経塚から確認されている遺物は礫石経のみである。発掘時にも副納品は確認されておらず、現在でも経塚周辺に副納品らしいものは見られない。

礫石経の大部分は多宝如来堂の下に埋まっている状態であるので、今回見ることはできたのは、地表上に盛り上がっていた一部の礫石経である。堂の手前にせり出している礫石経のほとんどには、墨書が認められない。堂下の奥の方に手を伸ばして表採したものの中に、幾つか文字の確認できるものが含まれていた。発掘調査された礫石経塚の中には、経塚造営当初から墨書はなかったと考えられる礫石経を多く含む事例がある⁽¹⁶⁾。高寺経塚における墨書のない礫石経に関して、ただ単に墨書が消えてしまっただけなのか、それとも何か意味のあるものなのかという問題が生じるが、それは今後の課題となろう。

今回表採した礫石経24点（墨書が確認できるもの）においては、川原石の長径に3.1cm～8.3cmと開きがあるが、ほとんどが扁平である。文字の書きやすい石を、選んで持ってきている様子が窺える。経塚のすぐ北側には高寺川が流れ、北東1kmの地点で高寺川と合流する小友川もあることから、川原石は手軽に採集できたものと思われる。

表採した礫石経の中で判別できた文字は、「者」「遊」「品」「此」「書」「無」「可」「七」「合」「憂」である。また、ある程度文字が推測できるものとしては、「量」「區」「誰」がある。「可」の文字のあるものが2点あり、これらに関しては同一人物の筆跡であると思われるが、今回の表採資料では書写に関わった人数にまで言及することはできない。

⑥考察

現状において礫石経埋納に関係すると思われるのは、「石経 佛 供養」銘を持った石仏である。この石仏には「享保七年」の紀年銘があるが、県内の紀年銘礫石経塚の分布を見ると、県南部（横手盆地内）における礫石経埋納の事例は元禄～享保年間にピークを迎えると考えられる（表1）。また、石仏を経碑⁽¹⁷⁾とする礫石経塚は、管見によると全国的にも何例か確認されている⁽¹⁸⁾。このような状況を考慮すると、高寺経塚においては石仏が経碑であり、享保7年（1722）に礫石経が埋納されたと想定される。

礫石経の「埋納方法」には、(Ⅰ)「塚状に土盛りした中に一石経を納める」、(Ⅱ)「一石経そのものを積み上げる」、(Ⅲ)「地中に土坑を設けて一石経を納め、その上に経碑を立てる」、(Ⅳ)「建物の床下などに一石経を納める」などの事例が確認されている⁽¹⁹⁾。高寺経塚においては、土坑中に礫石経を納め、それを埋め戻すことなく、そのまま直上にお堂が建てられたような状態が保たれており、一見(Ⅳ)の

事例に当てはまるように見える。だが、築造当時から経塚がその形態であったかどうかに関しては、疑問を覚える。

この石仏を観察すると、隣の無縫塔に比べて表面の磨耗が激しいのが確認できる。もちろん、無縫塔の方が石仏の造営年代よりも新しいのであるが、造営後200年以上経っているのにもかかわらず、無縫塔は良好な保存状態を保っている。このことは、無縫塔が造営後まもなくお堂に入れられたことを示すものと考ええる。そして石仏の磨耗が激しいことは、石仏が元々は野ざらしの状態であったことを想定させる。経碑は、一般的には礫石経を土中に埋納した上に置かれるものである⁽²⁰⁾。高寺経塚においても、礫石経が地表に盛り上がった現状を考慮すると、元々はいくらか塚状の高まりが形成されていたものと思われる。その上に、経碑である石仏が置かれていたのであろう。その遺構の状態は、次に取りあげる石持経塚と共通する。

3、石持経塚の概要

石持経塚の存在は平成16年11月23日、鎌田龍公氏に御教示頂いたものである。榊田もかつて本経塚を訪れているらしいが、詳しい報告はされていない。この度、本経塚を実見する機会を得たので、ここに紹介したい。また、本経塚は未登録の遺跡であるため、ここでは仮に「石持経塚」という呼称を使うこととする。

①遺跡の環境

石持経塚は大曲市内小友字石持に所在する。石持集落は高寺経塚の位置する高寺集落に隣接しており、石持経塚は高寺経塚の沢を挟んだ西側の山麓に位置している。経塚は山肌を削った整地面に、西側を向いた状態で造られている。周辺の地形が改変されているため、経塚への参道が元々どのような状況であったかは不明である。

②遺跡の現況

石持経塚も高寺経塚と同じく既に発掘されている。塚状の遺構があったとされるが、現在では正確な規模・形状をつかむことはできない。また、礫石経も埋め戻されているので、実見することはできない。現在観察できるのは、経碑のみである。

経碑は安山岩製で、高さ80cm、幅15cm、厚さ11cmであり、頭部山形の形状を呈する。経碑台座は31cm×32cmのほぼ正方形で、土に埋まっているので正確な数字は出せないが、高さは9.5cm以上である。

経碑正面には「奉石書法華一部供養□」の文字が、向かって左側面には「…享二…」の文字が確認できる⁽²¹⁾。磨耗が激しく、側面ではっきり判読出来るのは上記2文字のみであるが、文字の残存部分から、延享2年（1745）に造られた経碑であることが分かる。経碑正面の銘から、礫石経に書写されたのは法華経である。

③経塚発掘時の状況

石持経塚は昭和44年頃、管理者の加藤多一郎・忠士両氏によって発掘されている。加藤忠士氏の証言を基に、経塚発掘時の状況について書き記す。

（イ）経塚上の経碑の管理は、ずっと加藤家で行っていた。だが、経碑の下に何かが埋まっているという伝承はなかった。毎年盆と正月には、経碑にお供え物をするなどしている。

- (ロ) 発掘前は、若干塚状に盛り上がった遺構の上に経碑が立っている状態であった。作業に入る前に、経碑を塚上から移動した。発掘にはスコップが使われたが、礫石経の出土を確認した時点で、手による礫石経の取り上げに入った。礫石経は、塚を 50cm ほど掘り下げた時点で確認した。
- (ハ) 礫石経は全て取り上げたが、「カマス 2 つ分」の量があった。多字一石経で、径 10cm ほどの扁平な川原石が使用され、石の両面にびっしりと文字が墨書されてあった。礫石経以外の遺物はなかった。
- (ニ) 礫石経を確認した深さから、もう礫石経が出土しなくなる深さまでは、1 m 以上あった。礫石経を納めていた土坑の大きさは、高寺経塚（畳半分くらい）ほど大きなものではなかった。ただ、経碑の台座（31cm × 32cm）よりは大きな土坑であった。
- (ホ) 発掘後は、礫石経を埋め戻し、塚状遺構も経碑も元のような状態に戻した。

④考察—高寺経塚と比較して

上述のように石持経塚と高寺経塚は、近接した位置関係にある。このことを踏まえた上で、両経塚の共通点、相違点を整理してみたい。

遺物について述べると、礫石経に扁平な川原石を使っている点、副納品を伴わない点は共通するが、礫石経の形態は高寺経塚が一字一石経、石持経塚が多字一石経と異なっている。

遺構については山の麓の整地面に立地する点、経碑を設けている点、塚上の高まりの上に経碑を置いたと推定される点、土坑に直接礫石経を埋納している点は共通するが、経碑の形態、土坑の規模に違いが認められる。

両経塚の共通点のうち、礫石経に扁平な川原石を用いている点、副納品を伴わない点、土坑に直接礫石経を埋納している点は、礫石経塚に見られる全国的な傾向である⁽²²⁾。両経塚の位置・造営年代の近接関係を考慮すると、礫石経・経碑の形態、土坑の規模が大きく異なることは注目すべき事実であろう。それぞれの経塚に、違う造営者が想定される。山麓に立地する点、塚状の低い高まりを持つ点は、この地域の特色といえよう。

4、おわりに

高寺経塚・石持経塚は共に経碑を伴う礫石経塚であるが、具体的な経塚の造営目的を経碑から読み取るのは、現在では困難な状況になっている。だが両経塚の位置関係や特徴から、近世の高寺村・石持村の住人による作善業の遺跡であることが想定できる。享保 8 年（1723）の「仙乏郡郡境本村支村御高共調帳」によると、高寺村は 7 軒、石持村は 5 軒の家数であったらしい⁽²³⁾。礫石経塚においては、川原石に書かれた文字の筆跡から書写に関わった人数を推定することが行われているが⁽²⁴⁾、それはできる限り多数の礫石経を分析してこそ信憑性のあるものである。本稿で扱った 2 遺跡に関しては観察できた礫石経が少ないため、書写に関わった人数を推定できる段階には至っていない。経塚の造営が村の住人全員の手によるものなのか、それとも一部の住人の手にとどまるものなのかについては、今後の課題である。

また、高寺経塚においては満友寺との関係も問題になろう。菅江真澄が満友寺について、「…五倫台と今いふ観音山の片唄に在りしが、夜盗入り来て財宝をむさぼる事再三に及びしかば、今いふ寺山と字る処に遷し、また館前にうつせりといふ」と書いている⁽²⁵⁾。満友寺が館前に移転したのは明和 3 年

(1766)とされているが²⁶⁾、寺山にいつ、どのくらいの期間位置していたのかは不明である。高寺経塚造営時に満友寺が高寺山に位置していたとしたら、やはり経塚に何らかの影響を及ぼしていたと考えられよう²⁷⁾。

礫石経塚の中には、十分な調査をされないまま工事などによって消滅してしまう事例が少なくないが²⁸⁾、高寺経塚、石持経塚は、近世における民間信仰の様子を現代に伝えてくれているばかりでなく、今なお信仰の対象となって人々の心に安らぎを与えてくれている。貴重な文化財が住民の手により末永く伝えられることを祈り、文章の結びとしたい。

謝辞

本稿を執筆するに当たっては、下記の方々のご協力を頂きました。末筆ではありますが、感謝致します。

伊藤福右衛門・慶子夫妻（高寺経塚の管理者）・鎌田龍公氏（満友寺前住職）・加藤忠士・秀子夫妻（石持経塚の管理者）・枝川 元氏（大曲市教育委員会）・加藤加一氏（内小友の昔を語る会）・高橋 学氏（払田柵跡調査事務所）

註

- (1)「経塚」という用語は、経典を主体として埋納している遺跡に対して使われるべきであると考えているが、礫石経が埋納されている遺跡の中には、必ずしも経典が主体とはならない事例が少なからず見られる。本来「礫石経が埋納の主体とならない遺構」に関しては「経塚」という用語を使うべきではないが、混乱を避けるため、本稿では「礫石経が出土する遺跡」を全て「礫石経塚」と呼ぶことにする。
- (2)内田武志・宮本常一 「雪の出羽路 平鹿郡一」『菅江真澄全集』第6巻 未来社 1976（昭和51）年 P388 ※明沢経塚（平鹿郡平鹿町）についての記述がある。
内田武志・宮本常一 「月の出羽路 仙北郡一七・二三」『菅江真澄全集』第8巻 未来社 1979（昭和54）年 P25・207 ※みのり塚（仙北郡美郷町（旧仙南村））、法華経塚（仙北郡中仙町）についての記述がある。
内田武志・宮本常一 「おがらのたき」『菅江真澄遊覧記』4 平凡社 2000（平成12）年 P221～222 ※立石経塚（山本郡八森町）についての記述がある。
※菅江真澄（1754?～1829）は江戸時代の紀行家として知られる人物で、多くの著作を残している。
- (3)真崎勇助 『雲根録』 1874～1906（明治7～39）年 ※増田多吉屋敷遺跡（平鹿郡増田町）、梨木塚経塚（同地）、上深井経塚（仙北郡美郷町（旧仙南村））についての記述がある。
※真崎勇助（1841～1917）は古文書・考古資料の収集や古記録の筆写に力を注いだ人物であり、彼の残した収集品は「真崎コレクション」と呼ばれている。
- (4)武藤鉄城 「八津の環状石籬墳群」『考古学雑誌』第37巻第4号 1935（昭和10）年
- (5)奈良修介 「秋田の経塚」『考古学雑誌』第42巻第4号 1940（昭和15）年 ※奈良は後に経塚30ヶ所を集成している（奈良修介 「経塚地名表」『秋田考古学』第12号 1959（昭和34）年）。また礫石経出土地に関しては、1940年報告分以外の2遺跡について比較的詳細な報告を行っている（奈良修介 「経塚」『秋田県史』考古編 1977（昭和52）年）。
- (6)県内の礫石経出土地については、平成15年度に制作された集成を基本資料とさせて頂いた。この集成は、国立歴史民俗博物館が実施する『経塚データベース』のためにまとめられたものである。それによると県内には経塚（参考地含む）が175ヶ所存在し、礫石経埋納が考えられる地点はそのうちの131ヶ所になる。131ヶ所のうち、礫石経出土が確認されている事例は68ヶ所であり、残り63ヶ所は、経碑のみ確認の事例、文献の記録に残るのみの事例である。石造物を地上標識にする事例は、一般的に近世の礫石経塚に多いため（i）、礫石経塚参考地として数えた。だが、地上標識のみ確認の事例中、5つに「六十六部」「廻（回）国」といった

銘が見られる。これらについては、中世の六十六部聖の廻国納経に関わる経塚にも石碑を伴う事例が見られるという点 (ii)、六十六部聖に関わった可能性のある礫石経塚も確認されている点 (iii) を明示しておきたい。

(i) 関秀夫 『経塚の諸相とその展開』 雄山閣出版 1990 (平成2) 年 P635

(ii) 山形県朝日町に「弘治二年今月 奉納経廻国供養 念佛式百万遍供養」の銘のある石碑がある。朝日町・平布施家の記録によると、この石碑の下より「奉納大乘妙典六十六部」とある経筒が発見されたとされる。

関秀夫 『経塚』 ニュー・サイエンス社 1985 (昭和60) 年 P51

(iii) 具体的な事例としては、新潟県北魚沼郡川口町・六十六部の供養塔が挙げられる。川口町史編さん委員会 『川口町史』 1986 (昭和61) 年 P623

- (7) 鳥海町の調査事例…長坂経塚は由利郡鳥海町上川内字長坂に所在し、鳥海村郷土調査会により昭和39年に発掘調査された。鳥海町史編纂委員会・鳥海町企画課 「文化伝承編 民間信仰」 『鳥海町史』 1985 (昭和60) 年 P1503

神岡町の調査事例…三本杉経塚 (登録遺跡名。別名・船戸経塚) は仙北郡神岡町北楢岡字船戸348に所在し、神岡町教育委員会によって発掘調査された。現在、経塚があった場所の近くに標柱が建っており、「船戸経塚は～水田にあったが、圃場整備事業により平成8年に発掘された。川原石に一文字ずつ経文が書かれた礫石経塚であるが、营造の時期や経典は明らかでない。」と記されている。

- (8) 内田武志・宮本常一 「月の出羽路 仙北郡八」 『菅江真澄全集』 第7巻 1978 (昭和53) 年 P276

- (9) 榊田凌次郎 「内小友高寺の経塚について」 『大曲市郷土史資料』 6号 1965 (昭和40) 年

※菅江真澄は、難波平治満友を天養・久安 (1144～1150) の頃の人としている。この菅江の記録を踏まえ、大坂高昭が「満友」について考察をしている。註8文献 (内田・宮本) P283 大坂高昭 『秋田県曹洞宗編年史』 無明舎出版 1999 (平成11) 年 P124

- (10) 註9文献 (榊田)

- (11) 榊田は「即翁禅心沙弥 板井田弟助之父」と報告しているが、正しくは「即翁禅心沙弥 板井田第助之父」である。内小友満友寺の鎌田龍公氏よりご教示頂いた。また、この人物は高寺経塚西側の閑居屋敷跡に住んでいた僧であるという。

- (12) 榊田は台座正面の銘を「石経 仏 供養」、左側の銘を「享保七 年寅 九月七日」と報告しているが、今回は現地で確認した内容を本文中に記した。

- (13) 礫石経塚の中には、当初から墨書のされていない川原石が礫石経と一緒に埋納されている事例がある。高寺経塚に埋納されている全ての川原石に、経塚造営当初から墨書があったのかどうかは不明であるが、本稿では「墨書の無い川原石」と「礫石経の材料としての川原石」との混同を避けるため、経塚に埋納されてある川原石はすべて「礫石経」と呼ぶことにする。

- (14) 伊藤氏によると、扁平な川原石の両面に文字を書写してあるものがあったかについては不明であるという。

- (15) 伊藤氏によると、礫石経が埋納されていた部分は「四角い形」をしていたそうである。

- (16) 註6 (i) 文献 (関) P646

財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 「萩原城跡」 『灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (V)』 2003 (平成15) 年 P68

- (17) 礫石経塚の地上標識については、関秀夫氏の以下の一文に従って「経碑」の用語を用いることとする。「一石経の経塚の標識としては、石碑や石塔などを建立するものもあり、これらを経碑と呼ぶのが一般的である。」

註6 (i) 文献 (関) P635

- (18) 山形県米沢市龍雲院境内経塚 (i)、福島県河沼郡湯川村常法寺経塚 (ii)、静岡県富士宮市二股村石経塚 (iii)、山梨県南巨摩郡南部町 (旧富沢町) 玉泉寺経塚 (iv)、大分県宇佐市仁聖寺の地藏 (v) などの事例がある。

(i) 山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館 『埋められた経 こめられた願いーやまがたの経塚ー』 2004 (平成16) 年 P41

(ii) 磐梯町教育委員会・磐梯山慧日寺資料館 『石に込められた祈りー礫石経の世界ー』 2002 (平成14) 年 P6～7・13

(iii) 松原典明 「礫石経研究序説」 『考古学論究』 第3号 1994 (平成6) 年 P8

(iv) 山梨県埋蔵文化財センター (田代孝) 『民間信仰遺跡分布調査報告書ー近世の経塚ー』 2001 (平成

13) 年 P13・図版14

(v) 註6 (i) 文献(関) P637～638

(19) 註18文献(田代) P32 ※上記文献の「埋納方法」の分類は、山梨県内の事例を分析した結果出されたものであるが、全国的な傾向にも当てはまると考えられるので引用した。ちなみに松原典明は、田代の遺構の分類よりも更に詳細な分類を行っている。ただし松原の分類では、礫石経を土中に埋納した事例が中心となっている。 註18文献(松原) P4～24

(20) 註18文献(田代) P32 ※ただし、全ての経碑の下部に礫石経が埋納されているとは限らない。関秀夫によると、一見経碑に見えるものの中には、「別の形で行なった經典の書写供養などの記念のために残されたもの」もあるという。また経碑の場合、後世に元々の位置から動かされてしまって、礫石経埋納部分と分離されている場合もある。 註6 (i) 文献(関) P635

(21) 経碑表面は全体的に磨耗が激しく、文字は拓本をとってようやく判読できるような状態である。

(22) 三宅敏之 「経塚の遺物」『新版仏教考古学講座』第6巻 1984(昭和59)年 P95

註6 (i) 文献(関) P646 註18文献(田代) P32

(23) 下中邦彦 「大曲市」『秋田県の地名』平凡社 1980(昭和55)年 P323

(24) 管見によるが、代表的なものとして次の3遺跡を挙げる。

坂本洋一 「八戸市笹ノ沢頭所在の経塚について」『考古学ジャーナル』220 1983(昭和58)年 P7 ※礫石経の書き手が2人以上いたことを指摘している。

山形県教育委員会 『郡之神遺跡 第2次発掘調査報告書』1993(平成5)年 P29 ※礫石経の書き手が複数存在した可能性を指摘している。

米沢市教育委員会 『覚範寺廃寺跡 第Ⅰ次・第Ⅱ次発掘調査報告書』1989(平成元)年 P103 ※礫石経の書き手を、20～30人位と想定している。

柏崎市教育委員会 「庚申塚の経塚」『横山東遺跡群Ⅰ』2000(平成12)年 P84 ※礫石経の書き手が複数存在したことを指摘している。

(25) 註8文献(内田・宮本) P283

(26) 駒澤大学内禅学大辞典編纂所 『禅学大辞典』下巻 大修館書店 1978(昭和53)年 P1180

註9文献(大坂) P411 ※現在の満友寺旧山門の棟札に「明和二年建立」(1765)とあり、この頃までに館前に伽藍が整備されたものと思われる。秋田魁新報社出版部 「県南部 大曲・仙北地区」『心のふる里 秋田のお寺』秋田魁新報社 1997(平成9)年 P269

(27) 高寺経塚が造営された享保7年には、満友寺は既に曹洞宗寺院として成立していたと考えられている。

註9文献(大坂) P148

(28) 註6 (i) 文献(関) P577

表1 秋田県における紀年銘礫石経塚の分布

	県北	中央	県南	合計
近世以前	1		1	2
元禄年間(1668～1703)			3	3
宝永年間(1704～1710)		1	1	2
正徳年間(1711～1715)	1			1
享保年間(1716～1735)		5	2	7
元文年間(1736～1740)	1	1		2
寛保年間(1741～1743)				0
延享年間(1744～1747)		2		2
寛延年間(1748～1750)				0
宝暦年間(1751～1763)	5	5		10
明和年間(1764～1771)	5	3	1	9
安永年間(1772～1780)		1	1	2
天明年間(1781～1788)		2		2
寛政年間(1789～1800)				0
享和年間(1801～1803)				0
文化年間(1804～1817)		1		1
文政年間(1818～1829)		1		1
天保年間(1830～1843)	2			2
弘化年間(1844～1847)		1		1
嘉永年間(1848～1853)				0
安政年間(1854～1859)			1	1
明治以降(1868～)	1		1	2
合計	16	23	11	50

(高寺・石持経塚を除く)



図版1 高寺経塚(多宝如来堂)近景



(上) 図版2 高寺経塚現況① 堂正面から撮影。
←堂下に礫石経がむき出しになっているのが見える。

(下) 図版3 高寺経塚現況② 堂右側からも
礫石経がせり出している。



図版4 高寺経塚経碑



表採した24点（墨書が確認できるもの）中、文字の残存状態が良好だったもの9点。ちなみに、左上の「者」は4.6×4.3 cm。

左から右へ、
上段「者」「遊」「品」
中段「此」「書」「無」
下段「可」「可」「七」。

図版5 高寺経塚出土の礫石経



図版6 石持経塚近景



図版7 石持経塚経碑